

②知的障害者援助技術

課題:知的障害者援助におけるエンパワメントと、実践においてどのような配慮や支援が必要かを述べなさい。

ソロモンによるエンパワメントの概念は、「スティグマ化された集団の構成メンバーの、否定的な評価によって引き起こされたパワーの欠如を軽減することを目指し、クライアントもしくはクライアントシステムに対応する一連の諸活動にソーシャルワーカーが関わる過程」とされている。ソロモンの概念やその後の実践の過程から概ね導き出される要素は、①クライアントが問題解決の主導者であること。そしてそれを自認できる援助を行うこと、②クライアントが自ら活用できる知識や技術を自認できるよう援助を行うこと③クライアントがソーシャルワーカーをパートナーと認めるように援助すること。援助プロセスは協働作業であること④クライアントが抑圧的な社会制度改革に取り組めるように理解を深める援助をすることである。また、⑤パールマンがワーカビリティとして示すような、自らが問題解決に取り組める力を引き出すことと言えよう。これらに沿って知的障害者援助と実践における必要な配慮と支援について述べる。

上記①の問題解決の主導者、主体者として自認する支援について、知的障害者において配慮すべき点、支援は以下の通りである。知的障害者は、おかれた社会環境や障害特性により、成育過程で家族や機関等により保護される必要がある場面が多い。このことが、自己選択、自己決定において自らを主体者として自認しにくい要因となることが多い。従って、学齢期から徐々に自己選択の機会を提供する

とともに、青年期、成人期にかけては、より自己決定を重視した支援が必要である。この際に留意すべきことは、個々の障害特性や生育歴、個別性に配慮し、選択を容易にする方法を支援者が提供すること、選択した結果について本人とともに確認する機会を持つこと、選択による失敗を危惧し避けるのではなく、失敗による本人のダメージに配慮しつつ、選択による利益・不利益を事前に提示しながら、失敗によっても学習でき、最終的に失敗を含めた選択の成功体験を積み重ねられる支援が必要である。

上記②の援助の配慮点は以下の通りである。知的障害者はその知的能力に配慮した知識、技術の習得が求められる。習得においては理解できる習得方法の提供とともに、単に知識に止まらず、体験と知識を平行して習得することが効果を上げることも多い。また知的能力ではなく、経験機会の制限という二次障害により習得できてない事項も多いことから、支援者は個々の経験に配慮して支援を行うことになる。そして、知識技術習得段階においては、一般的な知識・技術をボトムアップすると共に、生活場面に即し、また個々の生活目標に応じトッピングする視点も重要である。また特に、権利侵害を受けやすい特性から、相談支援機関、権利擁護機関・事業、成年後見制度等に関する情報提供も必要である。

③の援助については、支援者が支援プロセ

スの中で実践しながら行うことが中心となるが、これに加え支援専門職としての利用者への権利擁護、守秘義務、インフォームドコンセント等については、それぞれの理解力に沿った説明を行うべきである。また、協働作業であるという点について、特に共感関係の構築が重要な要素である。知的障害分野においては特に、支援プロセスが支援者による実施であるという傾向に陥りがちである。支援者が、利用者が主体であるという認識を明確に持ち、側面的支援者としての役割の中で共感関係を基礎にして支援関係を作るプロセスが支援である。知的障害者は、一部にコミュニケーション障害を持つことが多いだけでなく、支援者との間には保護的な関係を生じやすく、他者との関係では被害的経験を多く体験していることから人に対する不審や恐怖感情を抱くことも多い。また、他者と一対一の体験を未経験であることが多く、対人関係がうまく取れないことが多い。従って、個々の経験と特性に応じて丁寧に支援者との対人関係を構築する必要がある。支援者との関係構築が、その後の

社会の中での人間関係でのエンパワメントの基礎となることも多い。

上記④は、社会的、経済的、政治的な自己実現を図る支援である。個々についての支援では、自己の有する権利についての理解支援に始まり、ひいては知的障害者として社会の中に位置づけられること、不利益な社会的条件改善のための本人活動等への支援につながる。本人活動と組織化に関する情報提供、ピアカウンセリングの実施、障害福祉全体に関する情報提供、広く社会に関する情報提供を行う等がこれに含まれる。

以上のようなプロセスを通じて、上記⑤に示されるような自らが問題解決に取り組める力を引き出す支援が、エンパワメントアプローチである。特に知的障害分野については、その障害特性とおかれた条件による支援が必要であると共に、他の領域と同様に、支援は個別性とQOL向上に最大限配慮して実施される。

講評:論理的にまとめてあり、本文を読みこなしたことが推測されます。実践現場におけるエンパワメントの考え方は、記述以外に、我が国においても多くの学者が示しており、それらを参考にすると、より強固な理論的裏付けを取れると思われれます。また、具体的な実践で、どのような方法があるのか、どうしたらエンパワメントできたか、できなかったか、その場合の課題は何であったのか等の記述があれば、説得力が増したと考えられます。